

近江神宮御創建に就て

翠 溪 生

我國上代に於ける皇居は清楚朴素のものであり、且又當時の風習として父子別居のことあり、随つて皇太子の宮居し給ひし所が先帝崩御の後其の儘皇居となつたのである。故に歴代毎に皇居の位置が變つたのである。大和地方には其の遺趾の存在するものが尠くない。彼の橿原の宮と云ひ、藤原の宮と云ひ、飛鳥の宮と云ひ、皇居移御の頻々たることを物語るものである。

然しながら以上の單なる理由以外に皇居移轉の事も行はれた。それは外國との交通關係上、適當の地を選定せられたり、又或特種の事情に依り移轉せられたこともないではない。

天智天皇が近江の志賀に都を奠められたのは、大和地方に於ける豪族の跋扈が強く、天皇御親政の理想的遂行が困難になつて、「青丹よし奈良山を越え、いかさまにおぼほしめせか」さゝなみの近江の志賀に都を奠め給ひ、以て人心を一新し、舊來の陋習墮力を打破し更始一新の政治を實現せんとせられた御思召に外ならぬ。歌聖人丸には其の遠謀深慮のあつたことが、判らなかつたのは無理もなからう。

惟ふに天智天皇は聖德皇太子と同じく、夙に大陸文化を採擇し、文彩彬々たる政治機構を建設することに邁進せられ、而も勇往の御氣質に至つては遙かに聖德皇太子を凌がせられた。御親ら干戈を執つて逆賊蘇我の入鹿に天誅を加へさせられたるが如き、其の御勇壯の程は察するに餘ある。

而して、叡明の御才能と鬼神も避くべき御氣魄とを以て、庶政萬端着々として遂行遊ばされた。

翻つて、當時の社會文化の程度を視るに、釋僧旻師が支那大陸より歸朝して初めて「彗星」の名を傳へて、一般人を驚歎せしめたるが如き、又富士河邊の大生部の多が昆虫の三變態を不思議として、常世の神として崇信し愚民を惑はし財寶を抛ち、家宅を捨てゝ、之を禮拜したるが如き醜態を演じた。

斯くの如く科學文明の程度低く、人間の觀察力の朦朧たる時代に於て、天智天皇が漏刻を作り鐘鼓を撃つて、民に時刻を示された如きは正に霹靂一聲、實に尖端的の御事業と敬仰拜察し奉るのである。昔時支那の堯帝が「曆象日月星辰、敬授人時」即ち賦役の民を有閑の時に使用せられた聖業以上の文化的施設であると、ひたすら敬虔の念措く能はざるものがある。

さゝなみの志賀の都は時代極めて短く歴史家の間に於て、其の遺趾は相當論議せられたのであるが、今回長くも御勅命に依り近江神宮の創建を見るに至

つた。吾等天文に心を寄せる者、心のときめきを感じさせられんやである。

又天智天山山科陵は京大花山天文臺の程近くに在り。「時の帝」と因縁淺からざるを痛切に感ずるものである。さもあらばあれ、皇紀二千六百年の記念事業として、創建せらるゝ近江神宮は「時のみかど」「學術のすめらぎ」として吾等同人とはに敬仰崇拜して、學術日本の將來を壽がんとする。

此の機會に於て吾等は敬虔の至誠を輸すべき、何等かの工夫もがなと思惟する。大前に至誠を表現すべき何物かを奉獻し、未來永却のモニュメントたらしめんと希求して已まない所である。

近江の荒都を過ぐる時、柿本人麿が詠める歌

玉繆^{たまも}畝^{すけ}火^ひの山の、樞^{つじ}原^{はら}の聖^あの御代^{みよ}ゆ、生^なれましゝ神^{かみ}の 盡^{ことごと}、樛^{つが}の木^いの彌^い織^{やう}々^{やう}
に、天^{あま}の下^{しも}知^しろし召^めしゝを、虚^{そら}見^み津^つ大^{おほ}和^わを置^おきて、如^い何^か様^{さま}に思^{おも}ほしめせか、
天^{あま}離^{はな}る^り歸^{かへ}にはあれど、石^{いし}走^{はし}る^る近^さ江^えの國^{くに}の、樂^ら浪^{なみ}の大^{おほ}津^つの宮^{みや}に、天^{あま}の下^{しも}知^しろし
めしけむ、天^{あま}皇^{すめらみ}の神^{かみ}の尊^{うや}の、大^{おほ}殿^{どの}は此^こ處^{この}と云^いへども、春^{はる}草^{くさ}の茂^もく生^なひたる、
霞^{あさぎり}立^たつ春^{はる}日^ひの霧^{きり}れる、百^{もも}磯^{いし}城^{しろ}の大^{おほ}宮^{みや}處^{ところ}、見^みれば悲^{かな}しも

反 歌

ささなみの 志^し賀^がの辛^さ碯^き 幸^{さき}くあれど
大^{おほ}官^{くわん}人^{にん}の 船^{ふね}待^{まち}ちかねつ
ささなみの 志^し賀^がの 大^{おほ}曲^{まが}よどむとも
昔^{むかし}の人^{ひと}に 亦^{また}も逢^あはめやも

ロ I デ 師 の 計

スペインの東部エブロ河畔にあるトルトIザ市の郊外の“エブロ天文臺”の臺長ロIデ師 Rev. Fr. Luis Rodés, S. J. は去る六月7日血壓昂進のため、地中海バレアリク諸島のマヨルカ島 Bianaraix 村に於いて逝去された。享年57歳。

前後30ケ年にもわたるロIデ師の研究生活は、天文と氣象と兩方面にわたつて、實に見事な成績であつた。師は若い頃、米國で教育を受け、エブロ天文臺長となつてからも、歐米諸國へ國際會議のため度々旅行をし、世界至る所に友を有つてゐた。最近、スペイン國の内亂のため、國內は共產軍と國民軍との間に争闘を事とし、其のため、師の天文臺も直接間接に被害も多かつた。中でも昨年四月12日、天文臺の所在地たる Roquestas が赤軍の手に陥つた前後には、師は病弱の身に、尙ほ職務上の責任を感じ、苦惱の極に達した。現に、筆者は昨年八月ストックホルム市で開かれた國際天文同盟の第6回總會に於いてロIデ師に會つた時、師は“エブロ河の名は、今後、天文臺の所在地としてよりも、戰場として、世界に有名になりませう”と言つて、暗い顔をしてゐられたのを覚えてゐる。師の晩年は、實に非常時動亂の一つの貴い犠牲となつたのであつた。